姫塚

実相寺　秀樹

生暖かい南風が吹く二月末の払暁、蛍は従者の貞重とともに屋島を発った。出立前、草履の鼻緒が切れ少し胸騒ぎをおぼえたが、新しいものに履き替え確かな足どりで小屋を出た。二日越しの嵐で橋が流されたため、松明を掲げた小船に乗って本土に渡り、八人の屈強な武者が守る総門をくぐり砦の外へ出た。十九夜の月はまだ南天に高く、たなびく雲間に見え隠れしている。月がのぞいたとき、空は紺白に鈍く光り、右手の屋島は墨をたらしたようにいっそう黒く浮かび上がる。

その日、蛍は治部卿局のお使いで、屋島から西方五里の府中の街へ行く予定だった。府中へはこの時間に出立しないと、日のあるうちに帰って来られない。

総門から半里歩くと、空が白み始めた。蛍は、治部卿局に見立ててもらった萌黄色に桜の模様の上衣を着て、市女笠と虫垂れを被り静々と歩く。本土と屋島の間の狭い水路沿いの街道を進むが、昨日の嵐の余韻か潮騒大きく、浜辺には多くの海草が打ち上げられ、ささくれだった流木が波打ち際でもだえている。大量の雨水が流れたあとの路面はいたるところえぐれており、街路樹の折れ枝もあちらこちらに散らばっている。

こんな荒れた雰囲気の道中だが、若い蛍の心は無性に躍っている。二月ぶりに砦の柵外に出られたのだ。

山と海に囲まれた狭い屋島の砦内で、いつ襲ってくるか分からぬ敵の影に怯えながら過ごす日々は、平家の女人達にとって非常に重苦しいものである。男どもは戦が晴れ舞台となりうるが、女どもは、いざ戦となれば恐れ慄き逃げ惑うしかない。蛍にとって今日のお使いは、そんな鬱屈した日常からしばしの間でも解放される、良い気晴らしになるはずであった。

蛍は十五歳。治部卿局付きの女官見習いで、本名は工藤蛍子。雪のように白い肌、豊かな頬、長い睫の下のきらきら輝く瞳が人を惹きつける美しい娘である。明るく朗らかな気立てで、周りの女官や女中から、「蛍、蛍っ」と追い使われていたが、機転がききまめまめしく働くので皆にかわいがられていた。

蛍の母、倫子はもと藤原姓。治部卿局と幼なじみで無二の友であった。ともに宮中では双璧をなす美貌で、幾人もの摂関家や平家の公達から言い寄られていた。治部卿局は平清盛の四男・平知盛に嫁いだが、倫子はいまをときめく平家一門に入らず、下級貴族の木工寮頭・工藤清宗の妻となった。倫子は誠実で勤勉な清宗に惹かれたという。残念ながら倫子は蛍が六つのときに病で亡くなった。その後、治部卿局が蛍を哀れんで引き取り、母親代わりのつもりで近侍させている。倫子を知っている者は、蛍が若いころの倫子と瓜二つだという。

蛍と貞重が出立してから一刻後、二人は宮脇村の小高い丘の頂に至った。そして、暁を見ようと振り返った時、先に目に入ったのは屋島のやや南方、本土から湧き上がる黒煙。しばし眺めていると、煙の出所は少しずつ北へ広がり見る見るうちに海に達した。ときどき火柱も見える。さらに今度は、屋島の裏側からも濛々と黒煙が上がり始めた。平家の根城である内裏や砦の方角だ。これはただ事ではない。

「戻りましょう」

蛍は、貞重に鋭く言った。

巳の刻、二人して屋島内裏の門前・古高松村の街の入り口にある大住神社まで戻ると、大勢の村人がお旅所に集まり騒いでいる。彼らを慰撫している顔見知りの宮司に蛍が尋ねると、

「どうもこうもありませんが。ちょうど明け方、五十人くらいの源氏を名乗る武者が街に入ってきて、いきなり火を放ったんですわ」

それを聞いた蛍は、不得要領の表情で寸刻思いをめぐらしていたが、

「貞重っ。総門まで行って見て来ておくれ」

と命じた。貞重は狩衣を着て黄金作りの太刀を佩いていたが、そばにいた農民が抱えていた野良着を借り、太刀を外して走り去った。その後姿はいかにもたくましい。

この左馬助・石井貞重は三十歳。身の丈五尺八寸の大兵。巌のような面、太い首、盛り上がった肩、引き締まったふくらはぎ、いかにも武士然とした風貌をしている。それも橙武者ではない。治部卿局の夫、平知盛股肱の家臣で、去る「一の谷の戦い」では、勝敗がほぼ決した後、知盛主従八騎で逃げていたが、それを源氏の精兵十五騎ほどが猟犬のごとく追っていた。味方が弓矢で射落とされたり、遅れて捕り篭められたりしながら、一人減り二人減り、浜辺に着いたときには、とうとう知盛と貞重だけになっていた。二町ほど沖に平家の

軍船が浮かんでいる。貞重は知盛を水馬で逃がした後、浜辺に踏みとどまり、十五騎の敵を独りで請け負った。幸い敵は矢を射尽くしており、騎乗の長刀での戦いとなったが、貞重はその場でまず三騎を斬り倒した後、西方へ駆け出した。浜辺では逃げると見せかけ、急に踵を返して敵を打ち落とし、浜から離れた松林の中では、大松の陰から神出鬼没に現れ敵を混乱させ、その隙に乗じて五騎の敵を葬った。そして、自慢の駿馬で敵を引き離し、なんと室津まで落ち延びた。そこで馬を代に漁師の小船を買いとり、自らの手漕ぎで讃岐国・屋島まで渡ってきたという大豪の武者だ。屋島に戻ると知盛が歓喜し、貞重の剛勇をめで、褒美に備前の名刀を贈った。知盛は別働隊としていま長門の彦島に出張っているが、愛する妻の護衛として貞重を付けている。貞重はいまだに独身だが、浮いた噂がなく職務に謹直なので、治部卿局も非常に信頼を置き、自らの外出はもちろん女官や女中のお使いにはたいていこの男を帯同させている。無口で無愛想だが根は優しいと評判だ。

話しを戻そう。蛍が付近を見回したところ、古高松の街は完全に焼け落ち、あちらこちらで煙がくすぶっている。一方、屋島の火事は内裏の屋敷や集落を燃やした後、山に延焼し、いまでは中腹辺りをゆっくりと上っている。

蛍は貞重を待っている間、思案していた。源氏の来襲というのがどうしても腑に落ちないのだ。それもそのはず、瀬戸の海上では哨戒船が昼夜問わず漕ぎ回っていたし、阿波国から伊予国の海岸線の要所には十分な見張りを置いていた。

実は、源義経率いる源氏の軍勢は、一昨日の風浪を冒して屋島のはるか南方、阿波の勝浦に上陸し、そこから讃岐山脈を越えて背後から屋島を奇襲したのだ。

四半刻後、貞重が戻って言うには、

「大変です。総門への通りには警戒線が敷かれ、それ以上向こうには行けません。敵は確かに源氏」

牟礼の総門へあと二町ほどの主街道では、見張りの兵が居並び、

「我らは源氏の軍勢じゃ。朝命により、平家を討伐に参った。刃向う者は容赦せぬぞ」

と居丈高に叫び、往来を断っていたそうだ。

蛍は、源氏の来襲が間違いないことを悟ると、近くに居た顔見知りの庭師と魚屋に銅銭を渡し、可能ならば戦況を物見して来るように頼んだ。

まず、庭師が戻って来て、

「主な門や船渡し場はすでに源氏兵に抑えられていて屋島には渡れません。いたるところに矢の刺さった死体や、血まみれでもがいている武者の姿が見られました。公達衣装や武者装束の方々は縄を掛けられ柵に縛られています」

その後しばらくして戻って来た魚屋は、牟礼の丘から遠望したのだが、浜に白旗を掲げた七・八十騎ほどの小勢、沖に赤旗をなびかせた百艘近くの大小の船が浮かんで睨み合っていたということだ。

蛍は貞重に物見を続けさせ、神社の離れで宮司とともに貞重の報告を待った。正午過ぎ、貞重が戻った直後、戦いが一段落したのか白旗を掲げた源氏の騎馬兵二人が神社にやって来た。雅た平家武者とは異なり、鎧や直垂、具足などは黒や茶を基調とし、分厚く頑丈で重々しい。

そのころ、村人達は焼け落ちた街に戻り、源氏の雑兵にあれこれ指図され、縮こまりながら後片付けをしていた。幸い、平家一門の宮司は蛍と貞重を匿ってくれたが、村人の心は分からない。いままで「平家様、平家様」と、奉ってくれてはいたが、流民に落ちた今でも京都時代の傲慢が消えない平家一族は、牟礼や古高松などの地元民から日用品や食料を買い叩いたり天皇家の祭祀という名目で、たびたび無料で物品を奉納させたりしていた。

案の定、村人の告げ口のせいで、大住神社に平家の女官と武者がいるということを聞きつけた源氏兵が捜索にやってきたのだ。宮司が離れの玄関で時間稼ぎをしている間に、二人は裏口から逃れ竹藪に隠れた。源氏兵は手分けして、離れや拝殿・本殿の中を土足のままでザッと調べた後、慌しく去って行った。

源氏兵が去り、しばらくしてから宮司が手招きした。二人が竹藪から出て行くと、宮司が、

「奴らが申すには、平家は敗れ、安徳天皇君は源氏の虜になったそうです。ここは危ない、すぐに逃げてください」

と言って、ずしりと重たい風呂敷包みを手渡してくれた。貞重は野良着姿のまま、平知盛下賜の名刀を菰にくるんで風呂敷包みとともに背負った。蛍は適当な着替えがなく、朝以来の旅装束のまま神社の外へ出た。

蛍と貞重は山々が連なる南方へ落ちることにした。幸い、源氏軍は兵力寡少のためか古高松

の外では見かけなかった。歩きながら、落ち行く先を考える。

「そうね、去年、治部卿局様とお参りに行った日室神社がいいわ」

日室神社は屋島の南西約五里の岩崎村にある古社で、去年の初夏に治部卿局が蛍と二人の女官、十人の護衛の武者を引き具してお参りしたのだ。そのとき貞重も随行していた。参拝に際して、治部卿局のいとこの叔父という宮司が、治部卿局を敬う姿は尋常ではなかった。初老の宮司は蛍や他の女官、そして護衛の武者に至るまで慇懃で、その応対に一切の粗略はなかった。

平家一門の凋落は治承四年から始まった。まず、平治の乱ののち伊豆に配流されていた源 頼朝の反乱を受け、討伐に出掛けた「富士川の戦い」でよもやの敗戦。翌年、平家の支柱・平清盛が病で死去。さらに、頼朝の従弟であるにもかかわらず別勢力を公言する信濃の源義仲と北陸の倶利伽羅峠で戦ったのだが大敗。そのまま義仲の進撃を許し、京都を追われた。清盛の孫にあたる五歳の安徳天皇を擁し、一族郎党を引き連れてまずは九州へ落ちたのだが、そこで地元の国司や豪族に裏切られ、命からがら逃げ出し、しばらく瀬戸内海を流浪した。幸い、阿波の豪族・田口成良の協力を得て、なんとか讃岐の屋島に落ち延び、そこに内裏や砦を急造し、捲土重来を期して閉じこもった。その後、瀬戸内海の制海権は維持しつつ、頼朝と義仲との身内同士の勢力争いに乗じてやや勢力を回復したが、京都奪還を目指して戦った摂津国での「一の谷の戦い」では、義仲を滅ぼし勢いに乗る頼朝が派遣した二人の弟、範頼・義経の連合軍に、これまた惨敗。多くの大将級の武将を失い、再び屋島に閉じこもった。幸い、源氏は水軍を持たないため追撃できず、それ以来、ほぼ一年間平穏を保っている。

「一の谷の戦い」の半年後、まだ敗戦の傷心が癒えぬ頃、治部卿局は気晴らしと戦勝祈願を兼ねて日室神社に参詣した。そして、当社の宮司の心温まる応対に皆慰められた。蛍は、あの宮司なら必ず助けてくれると確信を持って日室神社へ向かった。

美しい絹の着物をまとい虫垂れ衣姿の蛍はよく目立つ。街道を往来する人々や畑を耕す農民たちの視線を浴びながら、二人は急ぎ足で南を目指す。日室神社へは、二人ともおぼろげながら道を覚えている。とにかく、讃岐平野のどこからでものぞめる馬の背のような山を目指せばよいのだ。

途中通過した村々の広場には人が集まり、屋島からいまだ上り続ける白煙を眺めながら、

あれこれ言い囃(はや)している。畑を耕す農夫たちもしばしば手を休め屋島の方角をのぞんでいる。時間が経(た)つにつれ、なにやら人馬の往来が激しくなり、時折、地元武者らしき二十騎、三十騎の一団が馬をとばして駆けて来るが、そんなときは屋影に隠れたり脇道へそれたりした。さすがに人通りの多い街道は危ないと思い、できるだけ小道を選んで南下する。

四里は歩いたであろうか、途中、人気のない神社で一息入れる。手水鉢(ちょうずばち)で手を洗い脇の泉の水を飲むと、蛍の頬(ほお)に生気がみなぎった。そして、社(やしろ)に向かってこれからの無事を祈願した。

神社を発とうとすると、参道の出口近くの灯篭(とうろう)に先ほどは見えなかった小男が腰掛けている。肩を落とした姿は老人に見えたが、じろじろとこちらを見ている。目前に来ると、その男がいきなり立ち上がり、

「そこな方(かた)」

と、声を掛けてきた。貞重が素早く蛍の前に立ちはだかるが、蛍が制しその男の顔をしげしげとながめると、

「ああーっ、大工さん」

「やはり工藤様でございましたか。いやー、大変なことになりました。ご存知ですか」

「ご存知も何も、われわれはいま落ちている最中よ」

大工さんこと木工寮大工(もくりょうのもく)・木下利光(きのしたとしみつ)は蛍の父親の下で働く大工で、京都の頃、蛍の屋敷によく出入りしていた四十がらみの男だ。蛍とは落ち着いて話したことはないが、屋敷の庭や玄関でときどき挨拶を交わしていた。

人目をはばかり三人で境内(けいだい)の奥の茂みに入り、ひそひそと語り合う。

大工によれば、先日の嵐のせいで行宮(あんぐう)のひさしが飛んだため、大納言・平時忠(ときただ)に急ぎ修理するよう命ぜられた。今朝早く、屋島山麓(さんろく)の材木置き場で材木を見立てている最中に源氏の放火に合い、煙に巻かれながらも命からがら逃げ出したのだ。幸い、山道を西へ西へと辿(たど)ると山から抜け出せ、そこにいた漁師に陸へ渡してもらい一旦古高松村(ふるたかまつ)に戻った。しかし、駆け廻る源氏武者に恐れ慄(おのの)き、やみくもに南方へ逃げてきたというのだ。

顔見知りに出会い仲間が増え、少し緊張感がほぐれたためか空腹を覚えた。そういえば出立前の朝餉(あさげ)以来何も食べていない。途中お茶屋を五つほど通り過ぎたが、少しでも早く遠方

へ逃れるべく先を急いでいたので立ち寄らなかった。
幸い銭は持っている。蛍は、首から紐で吊るし懐にしまっていた財布をおもむろに取り出すと、中身をあらためた。母の形見の赤い絹の財布には、治部卿局から預かった小判二枚と銅銭三十枚、小遣いにいただいた銅銭五枚のうち、先ほど庭師と魚屋に渡した二枚を除いた三枚が入っている。
さらに、別の仕切りから朱塗りの櫛を取り出し、胸元に当てぐっと握り締めた。これは京都時代に契った許婚・佐藤彰通からもらったものだ。彰通は十八歳、治部卿局の又従弟で平知盛の小姓として仕えていた。平穏な世であればすでに祝言を挙げていたはずだが、源平争乱の下ではその暇はあろうはずもない。現在、彰通は長門で知盛と行動を共にしている。
蛍が財布をしまった後、貞重が背負ってきた例の風呂敷包みをここで開けてみる。中には縦一尺五寸、横一尺、厚さ八寸ほどの葛篭箱が入っており、ふたを開けるとまず目に入ったのは饅頭二つと煎餅が二枚。さらに風呂敷・手ぬぐいが数枚と大小の短刀二振、そして小さな巾着袋。中には銅銭十枚とお守り二つが入っていた。蛍は大住神社の宮司の心配りに感謝し、屋島の方角へ向かって、
「ありがとうございます。ありがとうございます」
と何度も呟いた。
饅頭は蛍と大工で、煎餅は貞重が食べた。
だいぶ日が傾いてきた。いつまでもこうしているわけにはいかない。重い腰をあげ、神社を出た。大工は落ち行く当てもないので、蛍と貞重に同行することになった。
一里ほど歩くととうとう日が暮れた。晴れてはいるが月の出遅く、すぐに闇夜となった。貞重が農家から買い取った松明を掲げ先導する。丘の上にたたずむ日室神社と思われる杜の陰を見失わないよう、田舎道を早足で歩く。松明の火の粉が飛び散り、闇夜にとけゆく様が儚かった。
戌の刻（午後八時）、やっと日室神社に着いた。三人が目指していた杜は正しかった。参道に入ると、半町ほど向こうに灯りが見えた。この界隈にも今日の源平の戦いの風聞が届いているのだろうか、本来なら眠っているはずの宮司は若い神官と拝殿で向かい合い、灯明の下でなにやら談義している。そこへ蛍の一行が静々と入って行った。

「宮司様、昨年参りました治部卿局様の下女でございますが、ご助力賜れませんか」
「ああっ、覚えております。確か蛍様とおっしゃいましたな。ご無事で何よりです。夕刻、郷司様から、屋島のお内裏に源軍が乗り込んできたと知らせてまいりました。聞くところによると、平家の皆様は船で海上に避難されたと。実際のところご首尾はいかがです。治部卿局様はご無事でしょうか」
と、以前と変わらず慇懃に尋ねてくる。蛍は宮司を信頼し、自分が古高松で見聞きしたことと、これまでの経緯を正直に打ち明けた。宮司は、
「なんと、帝が捕えられたと。それはゆゆしき事態。私は戦況を詳しくは存じ上げておりませんが、とにかく平家の皆様が船で逃れたとだけ聞きました。もしそのままだと、この辺りはじきに源氏の統治下に入ることでしょう。ここは平家ゆかりの神社、源氏方は必ず難癖つけてきます。まだ戦の帰趨は定かでありませんが、あなた様方は人目につかないほうが無難でございましょう。とにかく、裏へどうぞ」
と言って、境内奥のひなびた一庵に案内してくれた。四畳ほどの狭い室内はきれいに掃き清められており、旅人のための臨時の宿坊に使われているようだ。しばらく待っていると若い神官が握り飯とお茶を持って来てくれた。食べ終わった頃、今度は二人で夜具を抱えて来た。宮司が
「むさ苦しいところですが今夜はここでお泊まりください。その後のことは明朝決めましょう」
その夜、蛍は夢を見た。
半狂乱になりながら小船から大船に乗り移る平家の女人達。童達は母の袖にすがって泣き叫んでいる。治部卿局は大船の舳先に立ち、冷静かつ気丈な態度で人々を叱咤激励しながら迎えている。蛍は治部卿局の側に寄り添い、人々の手を引いている。
一町先では矢合わせが始まった。しかし、源氏方は矢雨の中を騎馬で猛然と突っ込んでくる。徒歩立ちの平家の雑兵はあっという間に蹴散らされ、武具を放り出し我先にと船に向かって泳ぎ始める。あまりに取り乱して女船に這い上がろうとする雑兵に対し、
「下郎、きたなし。浜へ返して一矢報いよ」
と、治部卿局はきりりと叱りつけている。

しばらくすると源氏の大将らしき男が波打ち際に馬の腹まで立ち込み、平家の主船に向かって名乗りを上げる。小兵の武者だが、赤地錦の直垂と紅裾濃の大鎧、鍬形打った白星の兜という平家の公達武者にも劣らぬ派手ないでたちで遠目にもよく目立つ。付き随っている法師武者は馬が小さく見えるほどの大男で、これも衆目を引く。騒然とする女船ではあったが、名乗りははっきりと聞こえた。

「検非違使の五位の尉・源義経」

なんと、去る「一の谷の戦い」で平家に惨敗を与えた大将の名ではないか。船上では皆、顔を見合わせしばしの間静寂が漂った。

大将が下がった後、源氏の騎兵が渚まで駆け寄り、軍船や女船など見さかいなく矢を放ち始めた。大半の矢は届かないが、中には強弓の猛者がいて、小船から時折悲鳴が上がる。女船の護衛の武者が矢防ぎの楯を並べ治部卿局を守るが、目前の楯が一瞬下がったとたん、百本に一本しか届かないはずの矢が治部卿局の首を刺し貫いた。ばったり倒れた治部卿局の傷口から流れ出る鮮血が甲板を濡らす。

「お局様、お局さまぁ」

と、蛍が叫んでいるところで、

「蛍様っ、蛍さまっ」

と肩をゆすられた。目を開けると、そこには貞重の巌のような顔があった。小窓からは日が差し込み、すずめがさえずっている。

「あらっ、もうこんな時間」

と、いつもの平静を装う蛍であったが、首筋は汗で濡れている。振り返ると大工はいびきをかきながら眠っている。貞重に、

「宮司さんは」

と尋ねると、

「近くの郷司様のお屋敷の様子見てくると言って、半刻前に出掛けました」

それから一刻後、宮司が戻ってきて言うには、

「すでに源軍勝利の通達が来ており、岡様一族の主立つ者や近郷の豪族がそろって談義しています。どうもあの様子だと源氏にお味方するようです。とにかく、岡様のお屋敷には伝令

が慌しく出入りしております」

「となると、近いうちに落人狩りが始まるわね。宮司さん、どうか助けてください」

「ここは、先日の治部卿局様の参拝により平家ゆかりの神社ということが近郷の者にも知れ渡っております。当社と岡家の当主・兼光様とは長らく懇意にしておりますので、私どもに危害を加えたりはなさらないでしょうが、おっつけ源軍直属の兵が来れば無事では済みません。ここは絶対に危ない。わかりました、私の弟が枌所村の猿飼というところで暮らしております。そこならばまずまずの山奥ですし、しばらく匿ってもらえるはずです。ここから、二刻ほどかかります。いまから手紙をしたためますのでしばらくお待ちください」

半刻ほどして宮司が戻ってきた。お盆に弟への手紙と地図、竹皮に包んだ三人分の握り飯、じゃらじゃら音がする巾着袋を載せていた。少しして、若い神官がどこで調達してきたのか、女物の野良着を抱えて来た。蛍は急いで着替えたが、腰まである自慢の黒髪は野良着の中に納めたので、なにやら妙な具合になった。そして、宮司の手紙といただいた巾着袋を懐に入れた。

正午、神社を出立しようとしたときだ。神社の前の街道で人々が騒ぐのが聞こえた。騎馬武者二騎と徒歩武者四人が、縄目にした男二人を引っ張り、門前を通り過ぎた。いかにも憎態な餓鬼が五・六人、竹棒を地面に叩きつけたり荒縄を振り回したりしながら遠巻きについて行っている。虜囚の頭は大童になり、狩衣は破れ散り、べっとりと血糊が付いている。木陰から覗き見していた貞重が、

「あな、景盛・親盛っ」

と呟き、今にも飛び出そうとするのを

「控えよっ」

と、蛍は貞重の袖をぐっと握りしめ離さなかった。一群が通り過ぎた後、貞重に尋ねると、幼馴染の兄弟で平家軍の同僚であったらしく、貞重は彼らを見捨てたことを非常に悔やんでいる様子だった。蛍は貞重を慰めながらも、こうも早く落人狩りが始まったことに驚いた。宮司が、

「彼らは岡様配下の雑兵で、源氏兵ではありません。しかし、今、落武者狩りが駆け回っているかもしれません。仕方ありません、もうしばらく待ちましょう」

三人は素直に昨夜泊まった庵に戻った。

宮司は岡屋敷に呼び出され、平家ゆかりの者がやってくれば必ず引き渡すように念を入れられ、今夜から日室神社に四・五人の警備兵を派遣すると言われた。そして宮司は屋敷にそのまま足止めされた。もし平家の者が日室神社を頼って落ちてくれば、宮司の心根ならば必ず匿うと見て、日頃から好を通じている宮司を守るための兼光の気遣いであった。

結局、未の刻になっても宮司は戻らず、若い神官に付近を見回りしてもらった後、蛍はお礼の書き置きをしたためた。平家の無事を祈って貞重の名刀をお礼も兼ねて寄進した。そして、誠に申し訳ないと恐縮しながら、三人は日室神社をあとにした。

蛍はいざというときの路用にと、上衣を風呂敷に包み背負った。市女笠と虫垂れは日室神社に置いて来た。大工が地図を見ながら先導する。蛍を挟んで貞重が周囲に鋭い目を配りながら付き随う。貞重はもちろん、蛍も古高松の宮司からもらった短刀を懐に忍ばせている。

半刻ほど歩くと完全に山道となった。さらに、半刻ほどで地図に御堂峠と書いてある見晴らしのよい場所へやって来た。先を急ぐがあまりにもお腹がすいたので、ここで一息入れる。握り飯を食べた後、皆で西方の重畳とした山並みを望む。すると、まだ高い夕日に照らされた蛍の豊かな頬が紅色に染まる。長い睫の下の瞳がきらきらと輝いている。貞重はそんな蛍の横顔を覗き見た時、

「この世にこんな美しい乙女が居るものか」

と、広隆寺の弥勒菩薩を思い浮かべながら、つくづく見入ってしまった。

「あと一里です。急ぎましょう」

と、大工が立ち上がる。

峠を下ると、寂しい谷間の道に変わった。空はまだ明るいが、木陰の道は暗く、今にもまやかしが出てきそうだ。沢の水音で、対話が聞きづらい。

しばらく進むと、山道はますます狭くなり、雑草はびこり踏み跡が薄くなった。どうも道を誤ったようだ。途中、辻や分岐がいくつかあったのだが、先日の嵐のせいで道が荒れており、どれが主道か判別しかねるのだ。

薄暗い中、三人で顔を寄せ合い地図を見ながら談義する。

そのときだ。蛍の耳元で「ビューッ」と、風が唸った。

「伏せろっ」
と、貞重の低い声。振り向くと貞重の背中の風呂敷包みに矢がささっている。数秒の沈黙の後、再び矢風が襲った。
「ううっ」
目前の大工のふくらはぎに矢が刺さっている。するとすぐさまバリバリと藪を掻き分ける音がして、三つの黒い影が沢の対岸から駆けて来た。
「山へ逃げ込めっ」
と、貞重。二人で大工の手をとり、脇の木立に駆け込んだ。
「大工さんは私に任せて、蛍様逃げてください」
と、貞重に背中を押され、後ろ髪引かれながらも山を駆け上る。背後から、
「待てーっ」
と叫び声がする。蛍は無我夢中で薄暗い胸突く山肌を駆け上るとすぐに尾根へ出た。尾根はまだ明るい。急いで脇の羊歯の中に隠れると、少し遅れて男が駆け上がってきた。相手からは逆光になり見えないが、蛍からは夕日に照らされた男の顔が皺まではっきりと見える。半弓を背負い、右手に鉈を持った猿のような小男で、右頬に大きな赤あざがある。しきりに唾をはいている。賊はしばらくその辺りをうろつき蛍を探すが見つからない。その時、たまたま仕事帰りの山師があった。賊はばつが悪そうに「おうっ」と言って、その山師とすれ違い、そのまますっと尾根道から外れ元来た山の中へ消えて行った。
一方、貞重は、山刀を持った小男と大斧を持った大男に挟まれている。大工は貞重が背にしている大木の裏側でかがみこみ、生きた心地もしなかった。貞重は短刀を構え二人の敵と睨み合っている。小男は右手から、大男は正面からにじり寄って来る。そして、小男の方が目潰しの砂を投げてきたと同時に、大斧を持った男が打ちかかって来た。貞重、砂を袖で払い落とし、すっと屈むと振り下ろしてきた大斧が背後の大木に食い込む。敵の目に一瞬戸惑いが走った瞬間、貞重が一気に跳ね上がり、短刀が一閃する。「ギャーッ」という断末魔の絶叫とともに大男の首から血が噴き出し、そのまま崩れ落ちた。それを見た小男は、貞重に向けて山刀をむやみやたらに振り回すが、木の枝が邪魔をしてまともに振れない。苛ついた挙句、山刀を貞重に投げつけ逃げにかかる。貞重はすぐにあとを追う。賊は道まで降りて元来た方

へ逃げようとする。なんと逃げ足の速い奴だ。貞重は追いつかぬと見て短刀を思い切り投げつけたが、それが見事、賊の背中に突き刺さった。賊は前のめりに泳いで、沢の斜面の草むらに突っ伏した。

貞重は賊の背中から短刀を引き抜くと、急いで大工のところへ戻って来て、矢を抜き手ぬぐいで強く縛り上げた。手ぬぐいは一瞬で真っ赤に染まった。しばらくすると、今度は上から「カサカサッ」と足音がする。蛍を追った賊が下りてきたのだ。貞重は藪に隠れ様子をうかがう。すると、路上に倒れた賊と同じ背格好の小男が道まで降りてきて、周りを警戒しながら、抑えた声で、

「兄者、あにじゃ」

と呼び掛ける。そして、路上に足だけ出して倒れている男のところへ駆け寄り、すぐに引き上げると、

「おおーっ、兄じゃぁー」

と、うめいた。

貞重が藪から飛び出し、小男の背後に立つ。小男はすぐに振り返り、

「きさまぁー」

と、鉈で斬りかかって来た。小男はむやみやたらに鉈を振り回すが、貞重は余裕を持ってあしらい手刀で鉈をたたき落とす。そして、小男の背後に回り込み左手で首を扼し、右手に持った短刀を賊の頬に当てがい、底響きのする声で、

「おとなしくしろっ、お前が追った方はどこだ」

と尋ねると、

「わからん、逃げたっ」

と言うやいなや、貞重の腕からすり抜け、この男も駆け出した。すぐさま貞重が短刀を投げつけるが、今度は当たらなかった。そのまま賊は沢の向こうの藪の中に消えていった。

貞重は再び大工のところへ戻り、

「大工さん、ちょっと待っていておくれ」

と言い残して、すぐさま山を駆け上った。

「蛍様、蛍さまー」

と何度も呼ばわったが、あいにくにわかな北風に吹き消され、まだそれほど離れていない蛍には聞こえなかった。

蛍は賊が立ち去った後しばらく様子をうかがっていたが、もう大丈夫と藪を出た。あの山師に助けを求めようとすぐにあとを追ったが、山師の足には及ばない。

この辺りの尾根は禿げているのですぐには暗くならず、日が落ちてからも四半刻ばかりはほのかな残光に覆われていた。しばらく進むと見通しの良い尾根の突端に出た。見下ろすとはるか山裾に民家の灯が見える。貞重と大工の安否が気になるが、戻るのは怖い。貞重の豪を信頼し、助けを求めるべく民家の灯を目指して歩き始めた。

しかし、とうとう夜の帳が下りた。星は出ているが月はなく、時を追って暗さは増すばかりだ。山道は下りに変わっており、山蔭の樹林帯に入ったところで漆黒の闇に包まれた。もう目隠しをしたように何も見えなくなり、蛍は窮してしまった。

立ち止まるのは恐ろしいが、どうあがいても進めない。蛍は仕方なく道端に座り込んだ。尾根では風の音や木々のざわめきが緊張感を高めたが、谷間に入ると急に風が止み、逆にその静けさが不気味な雰囲気を醸し出した。母が亡くなり、父が泊まりの仕事で帰らず、初めて一人で眠った夜を思い出した。すがるものもなく、非常な怖さと寂しさを覚えたあの闇夜だ。

梟の声にはすぐに慣れたが、時折聞こえる鳥や獣の「キャーッ」、「キキィーッ」という鳴き声や「カサカサッ」、「ガサガサッ」という藪掻き音にたじろぐ。蛍は全身に力を込め、その恐怖に耐えた。しかし、蛍はふと心持ちを変えた。鳥獣たちの存在を逆に頼りに思い、この暗い山の中でも孤独ではないのだと自らに言い聞かせ、夜が明けるまでここで待つ決心をした。

暗闇や鳥獣に対する恐怖は去ったが、今度は寒さとの戦いだ。眠ると凍え死ぬのは明らかだ。背中の風呂敷包みから上衣を取り出し、頭から被った。上衣の中で首に吊るした財布から櫛を取り出し、両手で包んだまま頬に当て、

「彰通様、どうか私を守ってください」

と、唱えながら時が過ぎるのをじっと待った。

どれほどたったであろうか、ふと瞳を上げるとこぶしほどの白い物が目に入った。夢かと

思い瞼をこするが、確かに見える。立ち上がって近づくと椿の花であった。「おやっ」と思い、視線を移すと樹間からいつの間にか下弦の月がのぞいている。椿の方へ視線を戻すと一筋の山道が明るく浮かび上がった。

蛍は疲れきった体に鞭を打ち、再び歩き始めた。この辺りは山の手入れが行き届いているせいか、しっかりした山道がついており、夜目に慣れてきた蛍は確かな足取りで歩み続ける。何ヶ所か山道が分かれていたが、とにかく太い方、踏み跡の濃い方を選んで歩き続けた。あとで戻れるように、分かれ道には枝と枝とを結んだり石を積み上げたりしながら歩き続ける。半刻ほど山道を下ると、やっと一間幅の踏みならされた里道へ出た。さらに四半刻ほど歩くと、灯が消えひっそりとたたずむ民家にたどり着いた。疲れ果てた蛍、もう声を出す元気もなく、勝手口の前でばったりと倒れ込んだ。

翌朝、戸を開けた老婆は目を見開いた。ちょうど朝日に照らされこの世のものとは思えない色彩が目に映ったのだ。老婆はまだ寝ぼけているのか、さてまた呆けてしまったのか、茫然自失となりしばしその色彩に見とれていた。

ふと我に返り、恐る恐る着物をはがすと、中から烏の濡れ羽色の黒髪と透き通る白玉のような柔肌の娘の顔がのぞいた。あまりにも動かないので死んでいるのかと思ったが、着物は温かい。

「お姫様っ、お姫さまっ」

と何度も揺り動かすと、蛍はやっと目を覚ました。

「あらっ、ここはどこっ」

蛍は少し錯乱していた。しばらく座ったままで五尺先の大根の葉屑を見つめていたが、突然、

「おばあさん、助けてください」

と叫んだ。

「まぁ、中へ」

と、壁土がところどころはがれた荒家に招き入れてくれた。湯気が立ち上ぼる囲炉裏の前に座ると、蛍の頬はみるみる紅潮し生気を取り戻した。老婆が囲炉裏に掛けてある鍋からふちの欠けた木の椀にお粥をついでくれた。それは絶妙な塩味で見慣れぬ木の芽が入っている。ほんのり青菜の香りがし、シャキシャキとした歯ごたえがある。老婆が、

「これはりょうぶ粥といって、りょうぶという木の新芽を干した後、ご飯のかさ増しに入れているんじゃよ。お姫様の口には合わんかもしれんけど」
蛍は、
「こんな美味しいお粥は食べたことがありません」
と、嘘偽りのない感想をもらしたのを老婆は終生忘れなかった。人心地ついてから、蛍は正直に名乗り、これまでの経緯を打ち明けた。
「おばあさん、私、山に戻らなければ。連れが二人、野盗に襲われたの」
「女だけで行っても昨日の二の舞じゃ。わしの息子が山師をしておるから、あやつに頼もう。もう少しすればやって来る」
老婆の言うとおり、四半刻ほどすると
「おふくろー、生きとるかぁー」
と、威勢の良い声が響いた。老婆の家の下手で妻と子供八人で暮らしている息子の清吉がやって来た。毎朝、山に入る前に母親を見舞っているのだ。
「ちょっと、ちょっと」
と老婆が清吉の袖を引き、中に連れ込むと、美しい蛍を見て清吉は驚いた。
「こ、こ、この方は」
「清吉ぃ、絶対他人にしゃべっちゃあかんぞ、この方は平家のお姫さんじゃ」
「お姫さんなんかじゃありません。ただの下女です」
と、蛍が正すが老婆は聞く耳を持たない。そして、蛍が清吉に昨夕の出来事を話すと、
「あっ、やっぱりあの時かぁ。なんか、怪しい奴やと思っとったんや」
そう、昨日蛍が襲われたときにすぐそばを通った山師はこの清吉なのだ。
「そんじゃあ、話は早い。だいたいの場所を覚えとるけん、おらがあそこら辺りを見てくるわ」
蛍も、
「私も一緒に」
と言って、立ち上がろうとしたが、ふらふらと崩れ落ちた。
「お姫さんは、もう少し休んでおり」

と、老婆に制止された。
一尺五寸の鉈を腰にぶら下げ、大斧を肩に掛けた清吉はゆうゆうと出掛けた。腕っぷしには自信があるらしい。老婆は、
「わしゃ、ちょっと下の集落まで行って様子を見てくるわ。うちらが戻ってくるまで、ここで休んでおいで」
蛍はまだ疲れが癒えていないのか、二人が出掛けた後、囲炉裏の前で眠ってしまった。
正午頃、老婆が戻って来て、
「屋島で一戦あったことは皆、知っとるげなで。だけど、落人狩りの話はまだだれもしよらん。ここらは田舎やけん、まだげなのぉ」
しばらくして、清吉が戻って来た。なんと貞重と大工を連れて。貞重と大工は異口同音、
「いやぁ、蛍様ご無事でなによりです。本当に心配し申しておりました」
蛍は、笑みと泣きっ面を交えた複雑な表情で、
「二人こそ本当に無事でよかったわ。一時はどうなるかと」
と、胸を撫で下ろした。
清吉が、
「昨日、野盗と会った辺りから下へ降りたら、藪の中に汚い格好の男が二人並んで死んどった。それから、下の道に降りてうろうろしとったら、このお二人がちょうど通りかかったんや」
貞重は野盗二人を倒した後、騒ぎになっては困るので、二つの死体を道から五間ほど上の斜面の藪の中に隠した。落ち葉をかけ懇ろに弔った後、大工を背負って御堂峠まで戻り、峠脇のお堂にもぐりこんで一夜を明かした。翌朝、もう一度襲われた場所に戻り、付近を探索したが蛍は見つからない。たまたま通りかかった清吉に蛍のことを尋ねると、ここへ案内してくれたというわけだ。
老婆はすぐに追加のお粥を炊き、貞重と大工にも振舞った。その後、貞重が大工を外へ連れ出し、傷口をよく洗い、老婆からもらった塗り薬をたっぷりと塗りこんだ。
「ちと、傷が深いのぉ。骨まで達しておるわ」
屋内では、蛍が、

「私たち、これからどうしたらよいのでしょう」
老婆は、
「ここらは、まだ山が浅い。やはり、猿飼まではよぉ行ったほうがええ。猿飼の太平さんゆうたら、炭焼きしよる人や。あの人の炭はつきがええゆうて有名や。お前、太平さんの家知っとるやろう」
「ほら知っとるわ。うちのもお袋んとこも太平さんの炭じゃ。おらが道案内するけん、すぐにでも発ったらええ」
蛍はそれを聞いてすぐに立ち上がった。
老婆との別れ際、お礼の銭を渡そうとしたが頑固に受け取らず、代わりに蛍の上衣を無理やり置いてきた。老婆の家での蛍の容姿、言葉、立ち振る舞いすべてが優雅で礼節があり、その印象は老婆と清吉の心に深く刻まれた。
未の刻（午後三時）、四人は出発した。和田集落の山のほとりを急ぎ足で歩く。即席で作った駕篭に大工を乗せて、清吉と貞重が担いで進む。二人のたくましい足腰に蛍は頼もしさを感じた。
途中、三つくらいの女童を抱いている母親に出会った。清吉の顔見知りの若妻だ。女童は野ばらの棘が肘に刺さったらしく、顔を皺くちゃにして大声で泣いている。童が大好きな蛍は、落去の最中ということを忘れ、母親の手からひょいと女童を抱き取りあやし始めた。そして赤く腫れた肘に口びるを当て、「ちゅっちゅ」と吸ってやると、すぐに泣き止んだ。それどころか「きゃっきゃ」言って笑い始めた。春のやわらかい日差しが蛍と女童を包んでいる。
「そろそろ行きましょう」
と、清吉がせかす。蛍は現実に戻り、急いで母親に女童を返し再び歩き始める。
狭い集落、四半刻（三十分）ほどの間に清吉の知り合いと五人も会った。彼らがいちいち、
「その人らぁ、だれやぁ」
と、声を掛けてくるので、
「親戚や」
とか
「急ぐけん、今度話すわ」
とか、無愛想に答えてはいたが、清吉は最後の爺さんには返事もせず、前を見据えて聞こえ

ないふりをしてやり過ごす。気の優しい蛍はそんな相手を気の毒に思い、自分が返事をしようかと思った。

出来るだけ人通りの少ない道を歩き、やっと人気のない山道に入った。しばらく行くと広場があり、ここで一息入れる。清吉が「やれやれ」といった表情で汗を拭いている。

地元の清吉の案内はさすがに頼られる。歩きやすい山道を選びつつ、小高い峠を二つ越えながらも一刻半で目的の家に着いた。清吉の母親の家よりもさらに荒家だ。清吉は、

「ここです。もう遅いのでおらは帰ります。くれぐれもご無事を祈っております」

と言い残して、駆け足で元来た山道へと消えていった。

戌の刻、太平の家の玄関を叩く。すると、しばらくして中年の恰幅の良い男が出てきた。大工と同い歳くらいだ。

「なんじゃ、こんな時刻に」

と、けげんそうに言う。

「日室神社の兄様からご紹介を受けました工藤蛍子と申す者です。このお手紙をお読みください」

と、懐から手紙を取り出した。男は奥の灯明の下へ行き、しばし手紙を読んでいたが急に態度を改め、

「そうですか。ようここまで無事に来られました。私のできることなら、できる限りご助力いたします」

と、頼もしい言葉をいただいた。

その夜、三人は囲炉裏の前で、太平がつくってくれた根菜汁と粟粥をいただいた。太平の人柄に安心した蛍は、この三日間の出来事を詳細に語った。そして、久しぶりに安らかな床についた。大工は傷口が痛むのか、時々唸っている。貞重は短刀を枕元に置き、半刻ごとに目を覚ます。蛍はこの三日間の疲れがどっと出たのか、息をするのも忘れたように眠りこけている。

翌朝、太平は暗いうちから起き出し炊事をしている。貞重も太平のすぐあとに起き出したが、炊事ができないので手持ち無沙汰で太平の作業を眺めている。大工は足の痛みで眠りは浅いが、太平と貞重の姿を薄目で見ながらうつろうつろしていた。蛍は言わずもがな、日が

高くなるまで一度も目覚めなかった。

蛍の目覚めを待たず、太平は貞重と大工にあとを頼み、頭より上に積み重ねた炭の袋を背負子に背負い近郊の集落に出掛けて行った。炭を売るついでに、落人狩りの噂を集めるつもりだ。

未の刻（午後二時）、帰ってきた太平が言うには、

「あなた様方が昨日立ち寄った和田にはまだ落人狩りのお達しは来ておりません。それなら、ここ猿飼はもうしばらく大丈夫でしょう。本当なら、讃岐を抜けて阿波の三好郡まで落ちるとよいのですが、大工さんのその足じゃあ無理ですな。しかし、この家に踏み込まれてはどうしようもありません。明日、前山の中腹の山小屋までお連れしますので、しばらくそこでお隠れなさいまし」

その晩も太平の家に泊めてもらった。夕餉の後、蛍は太平にこれまでの平家の流亡をつぶさに語った。太平も、わずかながら自らの境遇を語った。一人娘を四年前に亡くし、一昨年の秋に妻も亡くし、いまでは寂しいやもめ暮らしだ。秋・冬は炭焼き、春・夏は猫の額ほどの田畑を耕し細々と暮らしている。

翌日、蛍は太平の妻の野良着に着替え、早朝から出発した。太平と貞重が大工の乗った駕籠を担ぎ、休み休みで一刻半（三時間）ほどの山小屋に到着した。この小屋は太平の小屋の中では最も奥まったところにあり、一昨年の春まで使っていたものだ。

周辺の山は日陰を作るために残された数本の松や山桜の大木以外は、炭焼きのために伐り払われているので非常に日当たりが良い。草茫々の広場に直径・高さともに約一間半の大型の炭窯があり、そこから二間離れたところに山小屋がある。山小屋の外壁は杉のへぎ板をざっと張っているがところどころ外れている。屋根は檜の皮を何枚か重ね合わせたもので、一部ひさしが朽ち落ちている。ひさしの下には大きな蜂の巣が垂れ下がっている。ずれた戸を持ち上げながら開き中に入ると、「ぷーん」と朽木と土とかびの混じった匂いが漂う。中は土間で四畳半ほど、中央には囲炉裏がある。土間には湯飲み、茶碗、薪、丸太の椅子が無造作に置かれ、内壁には筵が二枚と箒、錆びた草刈り鎌が吊り下げられてある。ここの炭窯は太平の家から遠いので、炭焼きを手伝っていた妻と泊りがけで作業ができるようかなり大きめに作ってある。

蛍と大工が残り、再び貞重と太平が山を下る。蛍は手ぬぐいで頬っ被りをして、箒で壁や天井を掃き清める。京都時代は雑仕女がいたが、人手の足りない屋島では蛍が主に治部卿局の小屋を掃除していたので慣れている。大工は外で丸太の椅子に座り、湯飲みや茶碗を手ぬぐいで拭いている。しかし、少し足を動かすたびに顔を歪めている。

二刻半後、背負子にいっぱいの荷物を担いだ貞重と太平が戻って来た。筵で包んでいた貞重の荷物を開けると、土鍋、桶、包丁、まな板、お椀。太平の方は分厚い綿の入った布団に粟二升、大根、牛蒡各二本、青菜二束、塩、ろうそく、炭などをくるんで、蓑二枚で覆っていた。大工の傷薬もあった。水は小屋から五間ほど下りたところに沢がある。これだけあれば数日は暮らせる。

その後、皆で小屋の周りの草刈りをしたり薪を拾ったりした。

夕刻になり、太平の帰り際、蛍が手持ちの銅銭をすべて取り出し、

「当面、これをお使いください」

と、太平に手渡す。太平は最初拒んでいたが、

「これからしばらくお世話になるし、もし我々に何かあったときには、回向料にしてくだされ」

と、貞重が言うので、渋々受け取った。

暗くなった頃、太平は帰って行った。昨日の清吉といい今日の太平といい、山の民はこんなに暗くても夜目が効き、暗闇の中でよく歩けるものだと感心した。灯明も松明も持っていないのだ。

その夜、薄暗いうちは松脂のろうそくを灯す。完全に闇夜になってから囲炉裏に火を起こした。明るいうちに火を焚くと煙を人に見られるからだ。当時、昼間はあちらこちらから炭焼きの煙が上がっていたが、炭を焼く者は皆、お互いの炭窯の位置を知っており、太平があらぬ場所に居ると変な疑念を持たれる。

昼間に集めた落ち葉や木っ端をまず燃やし、その上に直径二寸、長さ一尺の太平自慢の炭をのせる。太平の炭は火つきが良い。パチパチと小気味良い音を立てながら炎が上がると、大工が鍋をかけた。蛍は料理ができない。武士の貞重はもちろんできない。ただ、大工だけは、若い頃現場で炊き出しをやらされていたので多少は心得がある。大根と牛蒡を乱切りに

し、適当に塩で味付けしたものを火にかけ、炊き上がると木の椀についで食べる。貞重は戦場で、大工は建築現場で慣れてはいるが、蛍はこんな粗末な料理は食べたことがない。しかし、昼間は働き通しだったので腹と背の皮がくっつきそうだ。皆、おかわりをしてあっという間に鍋の中は空っぽになった。

食後、今後の方策を話し合った。しかし、ほとんど情報がないのでどう動いてよいのやら皆目見当がつかない。その上、大工の足の傷が問題だ。貞重の戦での経験から、大工の矢傷が癒えるのには早くて二月はかかりそうだ。大工はザクロのように開いた傷口に塗り薬をつけながら、すまなさそうに、

「わしのせいで皆様の足手まといになりすいません。いざというときは、わしなんぞ置いて逃げてくださいな」

と、恐縮しきりであったが、蛍は、

「ここまできたら、皆、家族同然。死ぬも生きるも一連托生よ」

と、励ます。大工は涙を流しながら、

「すいません。すいません」

と繰り返していた。結局、もう少しここで様子を見ようということでまとまった。

そして、眠りにつく。囲炉裏の周りに三枚の筵を敷いて、蛍は布団、貞重と大工は蓑をかぶって横になる。今夜は風もなく穏やかな夜だ。時折、梟や獣の鳴き声がする。蛍は、燃え残りの炭の赤い光がフーッと広がったり縮んだりするのを見ていると心が落ち着き、いつの間にか深い眠りに落ちた。

まだ三月、さすがに朝は冷え込み、寒さで目覚めた貞重と大工は体を丸めこごえている。すでに白んだ時刻には火をつけるわけにはいかないのだ。たまらず貞重は外へ出た。すぐにビュンビュンと棒を振る音が聞こえてきた。大工は貞重の筵と蓑もかぶってがたがたと震えている。そんな二人を尻目に、蛍は暖かい布団を頭まで被って寝息をたてている。

陽が山小屋に差し中も暖かくなると、やっと蛍が起き出した。火が起こせないので朝餉は作れない。とりあえず、蛍と貞重で顔を洗いに下の沢へ下りると、岩場の水は半分凍っている。ちょろちょろ流れる水に手を入れると、

「冷たいっ」

二人ともあまりの冷たさに、一すくいの水だけで顔を洗った。貞重は大工のために桶に水をくんで戻る。

山小屋に戻ると同時に、太平がやって来た。開口一番、

「どうでしたか、山小屋の寝心地は」

「おかげさまで、ぐっすり眠れました。いい小屋ですね」

と、無邪気に答える蛍に対して、貞重と大工は顔を見合わせて苦笑い。

蛍が朝餉を食べていないことを太平に告げると、

「そや思うて、ええもん持って来ましたわ」

と言って、竹皮の包みを取り出すと、蒸した里芋が六つ並んでいた。蛍は、そのうち小ぶりなものを一つ手に取りほおばると、芯の部分はほんのり温かい。

「おいしいっ」

太平は他に布団一枚、全員の着替えを持って来た。本当に気の利く男だ。

今日、太平は近隣の集落の様子を見て来ると言って、午前中で帰って行った。

午後からは昨日の続き、蛍は小屋の掃除。今日は梁の上も拭いた。貞重は柴刈り。大工は相変わらず足が痛く、皆のすすめで昼寝をして過ごす。その分、夕餉の支度には精を出した。

昨日同様、完全に日が落ちてから囲炉裏に火を起こし、楽しい夕餉のひと時が始まる。今夜は昨日と同じ野菜のごった煮に粟飯が付いた。なんとも質素な食事だが、こんな場所こんな状況では本当にありがたい。もっと食べたかったが、今朝の二の舞にならないよう、明日の分も残しておく。

その夜、蛍が貞重に「屋島の戦い」の敗因を尋ねた。貞重は、平家の見張りが海上にばかり注意を払っていたため、背後の陸からの奇襲を予期していなかったこと、源氏の放火による煙に視界を妨げられ敵の軍容や兵数が把握できず、大群が襲ってきたと早合点したこと、帝を敵から遠ざけるのが最優先となり、皆がそれにつられて戦闘よりも逃げることが主目的になってしまったことなどを挙げた。屋島の平家は純然たる軍隊ではなく、文官や女人、童らを多く擁する雑軍のため、彼らを守ることが戦立ての障害になったことは間違いない。とにかく、数々の不運が重なった結果の敗戦が悔やまれる。蛍は特に治部卿局や女官の子ども達の安否を気に掛けていた。蛍は本当に子どもが好きで、手隙のときにはよく遊んでいた。

今夜は一枚増えた布団に大工が寝た。外は風が強く、木々がざわめく音で蛍はなかなか寝付けなかった。さらに、夜半から雨が降り出した。古い山小屋のことだ、二箇所から雨漏りがする。幸い雨は小降りで、梁の上に桶や鍋を置いてやりすごした。

翌朝も冷たい雨が降り続いている。冷めた朝餉を食べていると、蓑を掛けた太平がやって来た。今日は濡れてもよいもの、大根、里芋などの食料の追加があったが、貞重の布団はお預けだ。

太平は昨日、和田やその他二つの集落を廻った。どの集落でも屋島の戦の風聞は子供でも知っており、源氏が勝ったということは間違いがないようだ。しかし、今のところ目だった落人狩りの動きは見られないと言う。

午前中、太平も交えて今後の方策を改めて話し合った。太平の推測では、どうも落人狩りが鈍い。ということは、まだ戦は続いていると考えられる。確かに平家は屋島で負けたとはいえ、平知盛率いる別働隊がまだ長門の彦島に健在のはずなので、今後平家が反攻に出て戦況が覆る可能性がある。そうなれば、もう落ちる必要はなくなる。

逆にこのまま情報が滞ったり源氏の落人狩りが本格化したりすれば、ここ前山といえども讃岐の山は低く浅く、早かれ遅かれ見つかってしまう。その場合は、太平が言うように隣国・阿波の三好郡に逃れようということで意見は一致した。

太平が昼過ぎに帰った後も、春の雨はしとしとと日中降り続いた。うす暗いじめじめした山小屋でじっとしていると、ますます気持ちが落ち込む。すると、蛍が童歌を歌い始めた。

「すずめの子　粟の穂飲み込み、あわあわわっ」

貞重と大工が、くすりと笑う。

暗くなる頃、雨はやんだ。夕餉が終わり、しばらく談笑してから床に入る。今日の雨が結果的には良い休養になった。蛍は、昨夜のようにチロチロと燃える炭の残り火を薄目で眺めながらふと思い起こす。屋島を離れてからの数日間、本当に慌しかった。これが夢であればと思う。

その夜も、蛍はなかなか寝付けなかった。貞重と大工の寝息を立て始めても、蛍は相変わらず炭の残り火を見つめていた。すると、「ひゅーっ」と、すきま風が蛍の頬の上を撫でていき、その直後、消えかかっていた炭からチロチロと小さな炎が上がった。蛍はそれを見て、彰通

との出会いを思い出した。

あれは五年前、京都で平家が栄華を極めていた頃のことだ。彰通が平知盛に仕え始めて二日後、知盛邸の数軒隣りで火事があった。知盛は御所に参内し、治部卿局は歌会に出掛けて留守。二人が護衛のため男衆を引き具して行ったので、知盛邸には蛍をはじめとした女子衆と彰通などの小小姓数人しか残っていなかった。火事を知らせる鐘や笛が鳴り響くのを耳にして、蛍や彰通たちが急いで現場に出向いた。現場に着くと、春先の乾いた強風にあおられ、すでに屋敷の半分が猛火に覆われている。近所の人々が続々と集まり、桶に入った水を掛けているが焼け石に水である。その脇で蛍の知っている若妻が、狂ったように喚いている。中に一歳の赤子が取り残されているというのだ。それを聞いた彰通は急いで桶の水をかぶり、燃え盛る屋敷の中に飛び込んだ。そして、数分後、泣き叫ぶ赤子を脇に抱えて駆け出してきて、すぐさま赤子を母親に手渡した。彰通は休む間もなく消火を手伝ったが、しばらくしてから火消しが大勢やってきて何とか鎮火にこぎつけた。

鎮火後、蛍は慰労の言葉を掛けようと道端に座って休んでいる彰通に近づくと、手の甲にひどい火傷を負っているのに気が付いた。急いで手を引き知盛邸に連れ戻り、蛍自ら手当てをした。清水で洗い丁寧に拭いた後、塗り薬を付け白布で覆った。二人とも異性に慣れず、終始黙ったままで手当てが済むと、彰通が「ありがとう」と言った後、蛍の顔を指差し微笑んでいる。すぐ脇にあった鏡をのぞくと、蛍の鼻の下に彰通の髪に触れたとき付いたのであろう黒炭が口髭のようになっている。蛍はあまりに恥ずかしくて、走って洗い場へ行き急いで顔を洗った。それからというもの、蛍は彰通の火事場の雄姿と手当ての後の清らかな笑顔が忘れられず、恋心を抱いてしまった。彰通も同様、手当ての際に蛍の横顔をちらりと見た時、あまりの美しさに一目で惚れてしまった。

その後、廊下や庭先で出会うたびに軽く挨拶は交わすものの、お互い赤面して顔を伏せたまま通り過ぎるばかり。しかし、あの火事以来三ヶ月目で彰通が蛍と廊下ですれ違う際に、そっと手紙を渡し、近くの神社の境内に呼び出して、素直な気持ちを告白した。蛍にもちろん異存なく、それ以来二人は恋仲になり、仕事の後の薄暮に近くの森を散歩したり休みの合った日には二人で郊外の名所を訪れたりするようになった。彰通は聖徳太子を尊敬する清廉潔白な青年で、性素朴で優しく、蛍のことを心から大切にした。そして、一昨年の平家

都落ちの混乱の際、桂川のほとりで世が落ち着けば結婚しようと契った。その時、蛍がもらったのが朱塗りの櫛である。

そんな彰通のことを思うと、長門での生活や戦況を案じますます眠れなくなった。

山小屋暮らし四日目は朝から見事な晴天。気温はぐんぐん上昇し、気分も晴れる。今日も太平はいつもの時間にやって来た。薪割用の斧を手にし、鉈、木挽、金槌、釘、研石などを布団に包み、いつものように筵を掛けてやって来た。貞重はやっと今日から布団で寝られる。皆の着替えも脇に抱えている。見るからに大荷物だ。蛍が、

「着替えは五日に一度でいいですよ」

と言ったが、太平のことなので今後も毎日持って来るにちがいない。

今日は忙しい。まずは午前中、山小屋の修理だ。太平がどこからか檜の皮を剥いできて屋根の痛んだ箇所に敷き詰める。大工は貞重に伐って運んで来てもらった長さ一尺五寸、直径一尺ほどの杉の倒木の丸太を割ってへぎ板をつくっている。さすがは大工、丸太から厚さ一寸ほどの板を産み出した。それを貞重が山小屋の朽ちた屋根や開いた壁に釘で打ち付ける。蛍はあくびばかりしながら貞重を手伝っていたが、釘を打つ際、人差し指を金槌で叩いてしまい、ぽろりと涙をこぼしたのが可愛らしかった。大工は午前中の作業で疲れ果てた様子だったので、その日も皆のすすめで午後は小屋の中で横になっていた。

午後は、太平が貞重を連れて一刻ばかり出掛けていたが、戻って来た時には肩に三間ほどの太い竹を三本ずつ担いでいた。そして、太平が竹の切り口に鉈を叩き込み、貞重が上半分を持ち上げるときれいに二つに割れ、さらに太平が節を鉈の背で叩き壊す。蛍は小屋の周りで、手首くらいの太さの樫の木を選んで伐っている。木挽でひくのだが、慣れない手つきで危なっかしい上に、一本伐るごとに大息をついて座り込んでいる。そのうち竹割りの済んだ貞重に替わり、貞重が伐った樫の枝葉を太平が鉈で落とし、三尺ほどの長さに切っていく。そして、蛍がそれを二本組み合わせて紐を結ぶところで遅れている。最後に三人で紐を結び、材料が揃った。そして、一間ごとに樫の二脚の支柱を地面に突き立て、その上に割り竹を置いていく。すると、十二間ほど向こうの沢の小滝の落ち口から、小屋の前まで竹樋の水道ができた。これでいちいち下の沢まで下りていく必要がなくなり大いに助かる。こうして、四日目も無事に終わった。

五日目も晴天。太平がいつもより半刻ほど早くやって来た。とうとう太平のところに落人狩りのお達しが来たのだ。昨日、太平が昼過ぎに山小屋から帰った時、自宅の戸に張ってあった触書をそのまま三人に見せた。それは源氏の直令ではなく、郷司・岡兼光からのもので、

「屋島の戦いにおいて、朝命を奉じる源氏軍が平家軍を打ち破り、讃岐国は現在源氏の統治下にある。平家ゆかりの者や落人と思われ怪しい者がいれば、即刻、捕縛するか当家まで報告せよ。捕縛する場合はできるだけ生け捕りにせよ。手柄のあった者には褒美をとらせる」

蛍は山狩りがすぐに始まるのではないかと不安を感じたが、とにかく大工の足が治るまでは動けない。しかし、太平の変心は一切疑わなかった。ここまできた以上、太平に身を託すしかない。今日、太平は再び近隣の集落へ情報を集めるため、巳の刻には帰った。

落人狩りからの不安から逃れるためには働いているしかない。蛍は、いつまでも洗濯を太平に任せているわけにはいけないので、貞重に付き添ってもらい沢を半町ほど下り、日当たりの良い風呂桶くらいの小淵を見つけて手ぬぐいを洗ってみた。沢の水はまだまだ冷たいが、なんとか耐えられる。手ぬぐい五枚を洗ったあと、貞重にしっかりと絞ってもらい、小屋に持ち帰り木々の間に渡した紐に掛けて干しておくと、二刻後にはきれいに乾いた。

六日目はまた雨。いつもより早く太平が来て、昨日集めた情報を語った。昨日は炭を売りながら四つの集落を廻ったが、近隣の集落に目立った動きはないと言う。

雨のため外での作業ができないので、午前中、太平は貞重と追っ手が来た場合の避難路を下見するため蓑を着て出掛けた。蛍と大工は小屋で留守番をしながら、二人で京都時代の話に花を咲かせていた。蛍は、治部卿局の話をした。

蛍が治部卿局に仕え始めて一週間目のことだ。蛍が不注意で鉢植えの菊の花を折ってしまった。それを聞いた治部卿局はひどく怒り、

「蛍、菊の花を持ってじっとしていなさい」

と言って、一刻ほどその姿のままで立たされていた。蛍は泣きながら堪えた。刑が終わる頃、治部卿局が皆の前で、

「蛍よ、菊にも命があるもの。命の尊さが身にしみて分かったであろう。以後、不注意な振舞いは慎め」

と、強い口調で言った。蛍は、
「お許しください、お許しください。二度とこのような不手際はいたしません」
と、心から謝った。
夕刻、治部卿局が蛍を自室に呼び、
「今日は、きついことを言ってすまぬ。実はの、お前は私の親友・倫子殿の娘。皆がそれを知っておる。私がお前を甘やかすと他の女官衆が妬み、今後お前自身がつらい思いをする。だから、私は今日のように皆の前ではお前に厳しく当たるのじゃよ。今日のことは許せよ」
と言って、蛍の大好きな饅頭をくれた。蛍は涙をぽろぽろと流しながら、
「ありがたく承ります。不束な私ですが、今後ともよろしくご指導ください。今日は本当に申し訳ありませんでした」
と素直に言った。
そして、それ以後も治部卿局は言葉通り衆前では蛍に厳しく接したが、時折、蛍を自室に呼んで母との思い出話しをしてくれたりお菓子やお香などをくれたりした。休日に治部卿局じきじきに和歌や舞踊の指導もしていただいたのだが、それも生半可なものではなかった。
しかし、治部卿局の多岐にわたる厳しいしつけが、蛍をよく働く機敏な女性にしたことは確かで、蛍は歳若にもかかわらずそのことに対して恩義を感じている。
一方、大工は蛍の父との仕事の思い出を語った。蛍の父、木工寮頭・工藤清宗は宮廷の建築、土木を司る役人であった。生前は仕事が忙しく、あまり家庭のことは顧みなかったが、自宅に居るときは、庭木の手入れをしたり書を読んだりする穏やかな男であった。
あるとき清宗と大工が中納言・藤原秀紀の屋敷の新築に携わった際、完成まであと五日というところで、秀紀から思わぬ苦情が出た。寝室の主柱の節が人の目のように睨んできて落ち着かないと、愚にもつかぬことを言ってきたのである。そして、まずは近くにいた大工の利光を捕まえ責め立てた。いまさらその部屋の主柱を替えるとなると大変な作業になるので、利光は平謝りしたが秀紀は許さない。そこへ監督者の清宗がやって来て、利光が事情を話すと、
「この柱を交換するとなると、このお屋敷の三分の一を建て替えなければなりません。そう

なればあと二月待っていただかなければなりません。木目は木の個性、斑犬の模様と思し召し、なんとかこれでお許し願えませんでしょうか。どうしても否と申されるなら、その節の上に短冊でもお貼りして隠していただいたらよろしゅうございます」

と、少し阿呆な秀紀を丁寧に諭すと、

「そんなものかのぉ。まろは、はよぉ、この部屋で寝たいきに、このままでよいわぁ。おほほほほ・・・」

と言って、腰を振りながら去って行った。

他にも、大工は施主のつまらぬ文句や苦情を清宗に何度も救われた。不思議と清宗に説得されると、皆すぐに納得して丸くおさまるのだ。清宗は権高なところは少しもなく、大工や雑人分け隔てなくいつも親切で差し入れなどもよくしてくれた。清宗の下では、皆生き生きと働き仕事がはかどったという。

武人でもなくそんな穏やかな性格の清宗ではあったが、戦というものは残酷かつ無常である。ちょうど一年前の「一の谷の戦い」で砦を守っていた際、源氏の寡兵に背後の崖から奇襲を受け、慣れぬ太刀を振るって奮戦したが、あえなく討ち死にした。

七日目も雨、どうも菜種梅雨に入ったようだ。今日、太平は兄の日室神社まで足を伸ばすと言って来なかった。

蛍は考えた。太平が蛍一行を匿うことは、源氏優勢の現在にあっては危険極まりないことだ。兄の宮司は確かに平家とのつながりは深いが、太平は山奥の一人暮らしで、いわば俗世から離れた人間。なぜ、こんなにも律儀なのだろう。

実は、太平は二十年前、兄の伝手で讃岐国府の守衛をしていた。しかし、二年勤めた頃、守衛の長官と些細なことでもめ、頑固一徹の太平は仕事を辞めた。その後、兄に頼んで猿飼にある日室神社の社領の山守をすることになった。太平はよほど他人づきあいに懲りたのか、嬉々として山に引きこもった。折に触れて兄に世話になり恩義を感じているので、兄の頼みなら水火をいとわない覚悟はできている。

そして、その猿飼の地で二十五歳の時に妻を娶り、すぐに一人娘を授かった。名をお菊と言った。夫婦は非常にかわいがり大切に育てたが、そのお菊が四年前、病で亡くなった。二人は気が狂わんばかりに悲しんだ。お菊は生きていれば蛍と同い年だ。太平にすれば蛍がお

菊と重なり、どうしても放っておけないのだ。さらに一昨年の秋、妻が裏山で木の実を拾っている時に、誤って猟師に射られ落命した。最愛の娘、妻を続けざまに亡くし、その後太平は生きる気力を失っていた。そこへ蛍たちが現れ、彼女らを救済することに生きがいを求め始めているのだ。

翌朝、太平がやって来た。兄の宮司にはなんのお咎めもなく、普段どおりに働いていたそうだ。太平が兄から聞き集めた情報によると、

「平家本軍は屋島を捨てて瀬戸内海を渡り、長門の平知盛軍と合流すべく西方へ去った。その後、源氏も後続の直属の水軍や熊野水軍、伊予水軍などが合流し、つい先日屋島を発向したばかりだ」

岡兼光は最初の五日ほどは熱心に落人狩りをして、平家武者八人、女官二人、雑兵・下人十数人を捕縛して源氏に引き渡した。しかし、その後、源氏大勝の風聞がどうも誇張されたものだと分かり、やや日和見になっている。そもそも帝を捕らえたというのは源氏がまいた虚報であり、平家はほぼ元の兵力を維持したまま海上に去ったというのが真相らしい。

兼光は、太平の兄に胸中を打ち明けた。

「船数寡少な源氏の水軍には、熊野水軍や伊予水軍が合流したとは言うが、それでも海戦においては、いまだ平家に分があるとの噂があり、このまま源氏に見方をしていて大丈夫だろうか」

当時の田舎の豪族はまだまだ立場が安定せず、朝廷に対してもこのところ勃興した武家勢力に対しても気遣い、複雑な施策を強いられていた。岡兼光も例に漏れず、現在優勢な源氏に対しては保有兵力の八割の武者を差し出し従属を表明してはいるが、一方では、平家が逆転した場合も念頭に置き、落人狩りは控えている。そのおかげで、蛍たちもいまのところ無事でいられるのである。

蛍も平家の反攻に期待している。屋島の頃、守備隊長能登守・平教経が治部卿局の小屋を見廻りに来たときに、いつも平家水軍の強さを誇り、源氏の水軍など赤子の手をひねるようなものだと豪語していたからだ。蛍は教経の自信に満ちた表情を思い浮かべると、その言葉どおりにことが進み、平家が逆転するか、悪くとも源平の間で和睦が結ばれ、三人とも無事に山を下りられる日が来るのも近いのではないかと思われた。

三月半ばになり、だいぶ暖かくなった。いまだ本格的な落人狩りはされていないようだ。山小屋周辺は日当たりが良く、このごろの陽気で、わらび・ぜんまい・たらの芽などの山菜がたくさん出ている。三人はやっと山小屋の生活にも慣れ、太平の来訪も二日に一度に減った。太平はいつまでも自分の仕事を放っておくわけにはいかない。大工の傷口はまだ塞がっていないが、ようやく自分で立ち上がることができるようになった。

蛍たちの日課もほぼ定まった。朝は暖かくなるまで眠り、午前中、蛍と大工は洗濯、貞重は大工が削って作ってくれた樫の木刀で千回素振りをした後、付近の偵察と薪割り。午後、蛍は山菜採り、貞重は薪拾いや柴刈り、大工はできる範囲で小屋の修理や蛍が採った山菜や太平が持って来た野菜を洗ったり仕込んだりと、いつの間にか皆それぞれにふさわしい役割ができた。

夜は、暗くなってから夕餉づくり。蛍も大工を手伝っているうちに多少料理ができるようになり、楽しみが増えた。しかし、こんな山奥で贅沢はできない。毎度同じ野菜汁と粟粥。ただ、このところ山菜が具に加わり、多少は味覚に変化がついた。また、ときどき太平が兎や山鳥の肉を持って来てくれる。男衆は喜んで食べたが、蛍はかわいい兎や山鳥の姿を思い浮かべると、どうしても口にする気が起こらなかった。代わりに、太平がたまに届けてくれる饅頭を蛍は心待ちにしていた。

三月二十日、ここ前山の中腹は平地より半月遅く、いまが春爛漫。躑躅や山桜が咲き乱れ、小さい薄緑の葉もいっせいに芽吹いた。たまに寒い日もあるが、ほぼ気候は良い。相変わらず落人狩りの噂は聞こえてこない。大工の足の傷はほぼふさがったが、歩くとまだ突っ張るようだ。

その日、太平が兄からもらってきた酒を携えてやって来た。山小屋裏の一抱えもある山桜の下で、花見をしようというのだ。四人は山小屋裏の散り始めた山桜の下で花見を催した。都の仁和寺や嵐山にははるかに及ばないが、ぽかぽか陽気の下、一本きりの桜を愛でる花見はそれなりの風情がある。酒好きの大工と太平は何度も杯を交わしながら語り合っている。時々小唄まで出ている。厳い風貌に似合わず下戸の貞重は一口飲んだだけで真っ赤になり、青草の上に寝転んで腹の上に携えた太刀を鞘の上からさすりながら桜を見上げている。平知盛から授かった例の名刀だ。日室神社に謝礼として置いていった太刀だが、宮司は神社に

は無用のものと貞重に返すよう弟に託し、その日戻って来たばかりだ。

ところで蛍、これが初めての酒だが、一口飲んで「ううっ」と杯に戻してしまった。それを見て男衆が声を上げて笑う。鶯がぐぜり鳴きをしている。源平の戦が続いていることが疑われる、うららかな春の昼下がりである。

微風に時折、桜の花びらが一枚二枚と舞い落ちる。頬を紅に染めた蛍が、おもむろに立ち上がりそばにある榊の枝をぽきりと折り取り、静かに踊り始めた。蛍の舞の意外な巧みさ、艶やかさに男衆は目を見張った。髪に挿した朱塗りの櫛が、柔らかい春の陽を受けきらきらと輝く。そのとき、春疾風がしばし吹き荒れ、桜の花びらがはらはらと舞い落ちた。野良着姿ではあるが、桜吹雪の中で静々と舞い踊る蛍に、男衆は女神を見た。

翌日の昼過ぎ、蛍は太平の案内で近くの小峰の頂に上った。晴れてはいたが、あいにく霞がかかり遠方まで見渡せなかったが、山裾の和田の集落がよく見えた。街道を行き来する人々や畑で働く農夫が、蟻ん子のように見える。それを眺めていると、こんなちっぽけな人間同士がどうして憎みいがみ合い戦わなければならないのかと、蛍には不思議に思えてきた。平氏も源氏も藤原氏も、そして摂政・関白、農夫や乞食もみな同じ人間、なぜ身分や権力の差があるのだろうか。皆が、あるがままの自然やそこから得られる恵みを等しく分かち合い、ありきたりの生活をし、お互いを思いやって暮らせば、つまらぬ諍いなど起こらないはずだ。蛍は源平が和睦し、平安な世に戻ることを切々と太平に語った。

三月末、もう寒さで凍えるような日はない。山小屋の周りも新緑に囲まれ、さまざまな野花が咲いている。紋白蝶や蜜蜂が花々の間を乱舞する。草花や木々の息づかいが聞こえてくるようだ。土や草の匂いも上がってくる。山小屋裏の山桜は散ってしまったが、今度は石楠花が花盛り。そんな中、蛍は太平に買って来てもらった短冊に治部卿局から習いたての和歌をしたためている。この時期、山の中では和歌の題材に困らない。

ある日、蛍が洗濯をしているとき、彰通からもらった櫛を沢に落としてしまった。いつもは小屋に置いて来るのだが、その日に限って懐に浅く入れていた。普段、沢はちょろちょろの流れだが、その日は前日に降った雨のせいでやや水量が多く、蛍は半町ほど走ったが追いつけなかった。蛍は落胆のあまり、小屋に戻ると布団に包まって夕刻まで泣いていた。

三月晦日はどんより曇った肌寒い日であった。三人が朝餉を食べている最中、太平が暗い

顔をして小屋に入って来た。
太平は、昨日兄から得た情報を重い口調で語った。
「源平合戦の決着がついた。先日、長門国・壇ノ浦で源氏八百艘、平氏五百艘による壮絶な海戦が行われ、最初は互角に戦っていたが、途中から裏切りが相次ぎ平家軍は壊滅した。安徳天皇は祖母の二位ノ尼に抱かれて入水、大将・平知盛も入水、帝の母・建礼門院や治部卿局もあとを追うべく海に飛び込んだものの、敵に救い上げられ捕虜となった」
三人とも神妙な面持ちで聞いていたが、蛍は涙目をして大きなため息をついた。治部卿局の無事はなによりだが、平知盛が亡くなった以上、小姓の彰通が生きていようはずがない。一瞬、胸が張り裂けそうな悲嘆が襲ったが、蛍は一縷の望みを失わぬようこの場を耐え忍んだ。
とは言っても、ここに平家再興の灯が完全に吹き消された。そして、蛍は必ず迫り来るであろう落人狩りの恐怖に身が震える思いがした。
数日すると、蛍が案じたとおり落人狩りが再開した。一ヶ月半前の屋島の戦いでは相当数の平家の落人が山に隠れたという噂がたっている。長門で勝敗が決する前は日和見だった地元豪族が、少しでも源氏の覚えをよくしようと躍起になって落人狩りに精を出し始めたのだ。蛍が恐れていた状況がやってきた。
昨日、太平が畑を耕していると、岡兼光配下の武者がやって来て、
「先日、源氏が平氏を破り、讃岐は源氏のものとなった。平家ゆかりの者や怪しい者がいれば、即刻、捕縛するか岡様まで申し出よ。手柄のあった者には褒美をとらせる。逆に、匿った者があれば、一族郎党火あぶりの刑に処する」
と、馬上から居丈高に言い放って帰って行った。
ここで、すぐに落ちていればその後の状況は変わっていたかもしれない。しかし、山小屋生活にも慣れ、これまで平穏な日々が続いていたことと、大工の足の傷がもう少しで治りそうなのとが重なり行動が鈍重になった。
翌日、太平は和田やその他の集落を廻った。昨日は和田で地元民も徴発して総勢二百人での山狩りがあったそうだ。そう、蛍が野盗に襲われたあと歩き回ったあの山だ。山狩りの際、貞重が倒した野盗二人の死体は、山犬に食い荒らされ、まだ肉片の付いた骨が散らばってい

たと言う。

それから三日後、山小屋にゆゆしき人物がいることを、あの野盗の生き残り、通称・猿という男に知られてしまった。猿はあの時点では蛍たちを平家の落人とは知らずに襲ったが、あとで屋島の戦いの風聞を聞いて、彼女らが落人だと確信したのだ。猿は兄の復讐に燃えていた。いや、それよりも平家の落人を捕らえたあとの恩賞に絶大な期待を寄せていたのだ。

蛍らを襲った日から一週間、和田の集落をかぎまわり、怪しい三人連れの行方を尋ねて廻った。そして、清吉と蛍らが猿飼へ向かう山道へ消えて行ったという証言を得た。猿が和田の集落でかぎまわったせいで、清吉が疑われた。清吉は和田の郷長に呼ばれ当時の状況を尋ねられたが、道に迷った旅の者に食事を振る舞い、道案内をしただけだと言い張った。それゆえ、清吉は蛍一行のその後が気にはなっていたが、不審な動きを見張られているかもしれないと思い、身動きが取れなかった。

猿は、次に猿飼近辺をうろついたが、なかなか手掛りが得られない。もうほかへ落ちたかと諦めかけていた四月初め、久しぶりに猿飼を訪れ、ふと橋の上から沢をのぞくと小淵に何かが浮いている。河原へ下りてよく見ると、朱塗りの櫛であった。それをすくい上げた猿は、最初は何とも思わず、すぐに街へ下りて古道具屋に持ち込んだ。猿が見てもなかなかの品なので、小遣い程度には売れるだろうと考えた。古道具屋の主人は、

「これは、これは見事なお櫛ですなぁ。柘植に朱塗りとはこの辺りではなかなか手に入らぬものですわ。お公家さんかだれかの持ち物で」

猿は拾ったとは言わず適当に言い繕い、代として短刀を手に入れた。店を出ると、我慢していた頬肉が一気に緩み、狐のように狡猾な目が鋭く光った。小遣いを得た喜びなどどこ吹く風で、もっと大きな稼ぎを予感し、山へ向かって一目散に駆け出した。

そして、翌日から櫛を拾った沢のさらに上流をまたぐ山道沿いの藪にひそみ、数日間様子をうかがった。すると、三日目に大きな荷物を背負って山道を急ぐ太平を見た。猿がそのまま つけて行くと、太平は山の中腹にある山小屋に入った。そして、半刻ほどして出てきた太平以外の三人を見た猿は、

「これはしめたっ」

と、歓喜しながらも、太平が帰った後、しばらく間を置き慎重にその場を離れた。

兄と仲間が殺られたので今回は単独行動。猿はまず自らの手で蛍を生け捕りにしようと考えた。貞重と大工は家来筋らしいのでどうでもよい。貞重は手に合わないので、貞重がいない隙に大工を殺し、蛍だけを捕らえようと目論んだ。そして、蛍を郷司に引き渡す前に手篭めにするという奸計を抱くと、猿の口からよだれが垂れた。

翌日から猿は執念深く蛍たちの山小屋に通った。貞重の強豪は身にしみて知っているので、なんとか蛍と貞重が離れる機会を狙っているのだが、なかなかその機会が訪れない。しかし、通い始めてから六日目の風の強い日、暗いうちから山に入り、山小屋下の沢の対岸の斜面に身を隠した。しばらくすると、いつものように太平がやって来た。そして、貞重とともに鍬をもって山の下手へ下りていった。猿は、二人がこのごろ出始めた竹の子堀りに出掛けて行ったと確信した。

猿は勇奮した。山の斜面をそっと下りて沢を飛び越える。小屋から十間の距離まで近づき、木陰から改めて様子を伺った。手には先日手に入れた抜き身の短刀を握っている。さあ、小屋に押し入ろうと一歩踏み出したとたん、

「おいっ」

の声。振り向くと、居るはずのない貞重が仁王立ちしていた。猿は、目が飛び出しそうになるほど驚いたが、反射的に逃げ出した。五間ほど駆けると、今度は目前に太平が現れた。短刀を振るう間もなく太平の持つ棍棒で頭をしたたかに殴られ、ふらふらしているところを貞重に組み伏せられた。

太平は数日前から、途中までの山道を誰かが歩いていることに気付いていた。いつも山小屋の三町くらい手前から足跡は消えている。この山は日室神社の社領なので地元の者はむやみに入らない。また、この山道は三人の居る山小屋で行き止まりなので、山師や猟師が他の山への往来にもまず使わない。そこで、太平は足跡が消える辺りと山小屋周辺にいくつか罠を仕掛けておいた。細い糸を張ったり、わざとぬかるみをつくり、その上にうすく落ち葉を敷き詰めたりと巧妙な手口であったため、さすがの野盗の猿も気付かなかった。

蛍が、

「この男、間違いなく私達を襲った野盗よ。私、顔をはっきり覚えているわ」

夕刻、猿が目を覚ますと、小屋の裏の木にくくられていた。すぐに貞重がやって来て、猿

の短刀を突きつけながら問い質す。
「命がほしければ正直に言え。貴様は何者だ。落人狩りはどうなっているのだ」
「放せっ。わしが戻らんと仲間がすぐに郷司様に訴え出ることになっとるわ。すぐに追っ手が来るぞ」
と、口から出任せを言う。その後も
「放せぇーっ。放せぇーっ」
と大声で喚くので、万が一下の者に知られては大変と思い、貞重が猿のみぞおちに一撃。猿はガクッと首を垂れた。
これはゆゆしき事態だ。この猿が仲間とどのような打ち合わせをしているか分からない。すぐにこの場から離れなければならない。落ちる準備は数日前からできている。しかし、もう暗くなったので明日早朝に発つ予定で、蛍と大工は小屋の中で座ったまま仮眠をとり、貞重は山小屋の前で寝ずの番をした。太平は、落人狩りの人数が来れば必ず家の前を通るはずなので、見つけしだい夜中でも知らせに来ると言って帰って行った。もしかすると、これが太平との別れとなるかもしれず、蛍は
「本当にお世話になりました。このご恩は一生忘れません。世が落ち着けば必ずお礼に参ります」
と、涙を流しながら見送った。
木にくくりつけておいたはずの猿は、いつの間にか縄をかいくぐって逃げてしまった。猿は夜中、走りに走って、日の変わる頃、岡屋敷に駆け込み急を告げた。兼光が、
「すぐに落人狩りだ」
と部下に命令し、未明に出発した。
日の出頃、猿の案内で猿飼に到着した騎馬の先遣隊二十人は、静々と太平の家を取り囲んだ。召し捕り役の武者八人は異常なまでに気負い、太平宅の戸を叩き壊し、物々しく中に飛び込んだ。ところが、太平はおとなしく囲炉裏の前に座って、哀れむような眼で彼らを見ていた。召し捕り役は肩透かしをくらったような格好になり、不得要領で太平に縄をかけた。
太平は今日、自分が平家の落人を匿ったこと、そして彼女らの無実を訴えようと、縄目を受ける覚悟でいたのだ。彼女らの無力さ、けなげさを訴え、許しを乞えるものなら乞いたい

と思っていた。また、自分が彼女らと逃げ隠れすれば、兄に迷惑が掛かるのではないかとも考えた。

縄目を受けた太平は外へ引き出された。猿がどさくさまぎれに太平の顔を殴りつけ、唾を吐きかける。先遣隊の隊長に、

「何をしておる、大事な虜囚に」

と一喝され、すごすごと太平から離れたが、猿の目は次の獲物に向かってらんらんと燃えている。

しばらくして後続隊がやってきた。岡兼光配下の武者三十名、猿飼で徴発された農民百名で、辰の刻（午前八時）から山狩りが始まった。遅ればせながら和田や他の集落にも伝令が飛び交い、追々人数が増える手はずになっている。

巳の刻（午前九時）、猿を先頭に十人の健脚武者が山小屋に着いたがもうもぬけの殻。すぐにあとを追う。

蛍たち三人は日の出前に出発していたが、まともな山道ではない。胸を突く急な登り坂が続き、ところどころ藪に行く手を遮られるところもある。大工が足を引きずっている上に、貞重と蛍は背中いっぱいの荷物を担いでいるので歩みは非常に遅い。

一刻（二時間）ほど歩くと、大工が根を上げた。岩陰で休んでいると、山を駆け上る風に乗って呼子の音や馬のいななきが聞こえてきた。それに追い立てられるように再び歩き始めたが、やはり大工の足が遅々として進まない。昼を過ぎる頃には、歩くより休む時間のほうが長くなった。追っ手との距離は縮まるばかりだ。

未の刻（午後二時）、とうとう追っ手の先頭がちらりと見えたが、藪に隠れてやり過ごす。この辺りは太平の担当する山ではないので、荒れた雑木林や潅木の藪が格好の隠れ場所を提供した。幸い、十名ほどの追っ手の先鋒は蛍たち一行が進むのとは逆方向に駆けて行った。しばらく様子を見ていたが、まだ後続の気配はない。それを確認してから歩き始めるが、相変わらず大工の足が進まない。

そして、左手は断崖、右手は岩壁の細い切り通しにたどり着いた。古代の山人が切り開いた生活道だろう、素掘りのあとが見える。ここをやり過ごせば尾根に出て、太平が言うには、あとは一本道。その尾根まで貞重は下見済みである。

しかし、その切り通しを渡っているときに、三人は猿を含む追っ手の先鋒に発見された。すぐに背後から矢が飛んで来る。しかし、切り通しはうまく曲がっており、矢は当たらない。急いで蛍と大工は切り通しを渡った。後ろを振り返ると、貞重がついて来ない。

「先に行ってください」

と、貞重。

言われるままに、大工の手を引いて蛍は逃げる。この辺りは多少猟師や山師が使っているせいか踏み跡がしっかり付いており、すぐに尾根に出た。

猿はいつの間にか、貞重が立ちふさがる切り通しとは別の岩場をよじ登り、尾根に出た。しばらく駆けると、前方に大工の手を引きながら早足で逃げる蛍を捉えた。猿は五間の距離まで追いついたが、蛍は気付いていない。猿は慎重に矢をつがえ放った。それが大工の背中に刺さり、大工はもんどり打って倒れた。そして、猿は蛍に飛びかかり、尾根から外れた大岩の裏に引きずり込んだ。まだ、味方が来ていないことを承知で蛍を犯しにかかったのだ。平家の娘などそうそう抱けるものではない。猿は、必死で抵抗する蛍を押さえ付け、急いで猿轡をして、野良着を脱がせようとする。蛍の懐から短刀が落ちた。

そのときだ、猿は後頭部に異常な衝撃を受け、蛍の懐に突っ伏せた。瀕死の大工が最後の力を振りしぼって、猿の背後から岩石を打ち下ろしたのだ。

蛍が大工の頭を膝にのせ、

「大工さん、しっかりして。一緒に逃げるのよ」

大工は虫の息で蛍に語りかける、

「蛍様、ありがとうございました。あなた様と暮らした日々、本当に楽しかった。最後まで足手まといになるばかりで、本当に申し訳なかったです。くれぐれもご無事で・・・」

と言って、蛍の腕の中で息耐えた。

蛍は、短刀を拾い上げ涙をこらえながら尾根に戻り、早足で歩む。どういうわけか、追っ手は来ない。そう、貞重がいまだ崖の切り通しで敵を遮っているのだ。

最初、恐れを知らぬ追っ手の武者、功名の狩人どもが勢いよく貞重に斬りかかってきたが、貞重に難なく斬り伏せられ崖下にたたき落とされた。狭い切り通しでは一人ずつしか戦えず、五人の武者が貞重の刃の餌食になった。時間がたつにつれて追いついてきた武者や農民三十

人ほどが、貞重の前にひしめいた。さらに呼子が鳴り響く。
追っ手が矢を放つも、貞重はたくみに切り通しの陰に隠れて当たらない。追っ手の人数は次から次へと増え続けるが、貞重一人のために窮してしまった。
「お前、行け。お前、行け」
と、押し合いへし合いするものの、一向に貞重の手元に来ない。ついに武者の主立つ者が、
「行かねば、お前らの妻子を磔にするぞ」
と、農民十人を脅し竹槍や楯を持たせて突進させた。そして射手がその後ろについて行き、農民の背後からむやみやたらに矢を放つ。農民数人が背中に矢を受け崖下に転がりながらも、貞重の脇腹と左腕に矢が篦深に刺さった。
ここに貞重の剛勇極まる。貞重は修羅になった。楯を拾い上げ、矢を防ぎながら切り通しを駆け渡り、群集の中に飛び込んだ。そして、楯を投げ捨て武者だけを相手に斬りまくった。矢を持つ者はなすすべもなく斬られ、太刀をもつ者は太刀もろとも一刀両断された。十人ほどは即死、その他手負いは数知れず。
しかし、さすがの貞重も疲れ果てた。赤松の太いのにもたれかかり、半ばから折れた太刀をだらりと下げて幽鬼のように立ち尽くす。自らの血と敵の返り血で、顔も野良着も真っ赤に染まっている。木漏れ日が当たり、血まみれの顔が斑模様になり、あまりの壮絶な姿に、農民たちは遠巻きに取り囲むだけでだれも手出しをしようとはしない。一部の者は恐れ慄き、また一部の者は哀れを感じた。
しかし、背後から現れた新手の雑兵たちが、農民達の輪を押しのけ口々に喚きながら、もう動けぬ貞重を数本の槍で串刺しにした。
蛍は尾根を早足で進む。しばらくすると、貞重を倒した追っ手のざわめきが聞こえた。蛍は尾根から外れ、大きな山桜の裏に隠れる。声と足音からして、相当の人数が通り過ぎた。
蛍は山桜の太い幹にもたれて座り込んだ。遅咲きの桜の花びらが蛍の頭上ではらはらと舞い散った。
どれほどそうしていただろうか。蛍はふと我に返ると、いつの間にやら夕刻になっていた。しばらく人影が絶えたことに気付き尾根へ戻った。
少し歩くと禿げた小峰の頂に出て、急に視界が開けた。眼前に展開したのは広々とした讃岐

平野。ぽつりぽつりと小山が点在している。さらに向こうには紺碧の海。そして、右手に視線を移すと見覚えのある山容が目に入った。頂上が鉋で削ぎ落とされたような山、そう、あの屋島だ。茜色に染まるその山肌を見つめながら、

「ああ、このまま時が過ぎ去れば」

と思った。蛍は我を忘れ、膝をついてしばしその絶景に見とれていた。

しかし、ふと視線を下ろすと、中腹から麓に点々と連なる松明の群れ。逃れえぬことを知った蛍は鞘から短刀を抜き、じっと刀身を見つめた。

銀の刃にはさまざまな幻影が映し出された。仕事熱心な父、母代わりに優しく厳しく育ててくれた治部卿局、源氏の急襲以来今日まで苦難を共にしてきた貞重と大工。律儀に手助けをしてくれた地元の太平、清吉、お婆さん。楽しく優雅だった京都の暮らし。忙しかった屋島の日々。そして、貧しくひもじかったけれど、生きる喜びを心から味わった前山の山小屋生活。さまざまな思い出が走馬灯のように映る。

そして、彰通が微笑みながら手招きするのが映った。最後に、幼子の蛍を抱いて子守唄を歌っている母の姿。蛍は、

「お母さん、お母さーん」

と、呟いた。真珠の涙がぽろりとこぼれた。

「いたぞっ」

の叫びと共に、短刀が蛍の首筋に吸い込まれた。

追っ手が駆け寄ると、黒髪の女人がうつ伏せに倒れていた。

清吉も午後から山狩りに加わっていた。隙あらば助け出すつもりだったが、結局、蛍に出会うことはなかった。蛍のなきがらを見たとき、蛍の美しくけなげな姿を思い出し、とめどもなく涙が流れた。危うく嗚咽を漏らしそうになったが、慌てて取り巻きの輪から外れ、周りに気付かれぬようそっと涙を拭いた。

三人のなきがらは集められ、蛍が自害した場所に丁重に埋められた。

一方、猿の死体は、顔見知りの者に唾を吐きかけられたり足蹴にされたりして、そのまま

置き捨てられた。

太平は、源氏直属の部隊に引き渡され取調べを受けた。蛍たちの末路を聞いた太平は、世を捨てる覚悟で源氏の役人に毒づいた。蛍一行の優しさ、けなげさ、彼女らの和平への願いを縷々と述べたが、あまりに平家びいきの弁舌が取調官の心証を悪くした。また、勝ちに乗じて飛ぶ鳥を落とす勢いの源氏方に、敗者をいたわる気持ちはない。あわれ、太平は打ち首となった。

兄の宮司は、岡兼光がかばい無事だった。清吉と母親は、兼光預かりとなり、蛍一行の世話をしたことを白状したが、兼光の裁量によりお咎め無しに済んだ。

清吉は解放された後、息子二人と妻との四人で前山に登り、蛍たち三人が埋められている場所に再びやって来た。四人で手を合わせ、懇ろにお参りした後、妻は鎌で草刈り、男衆は付近をきょろきょろと物色し始めた。すぐに人頭大の礎石が四つ集められた。礎石は容易に見つかったが、その上に載せる平石がなかなか見つからない。半刻ほど丹念に探し回ると、長男が二十間ほど向こうの岩場で縦二尺五寸、横四尺、厚さ一尺ほどのだ円形の平岩を見つけた。目当てのものよりは大きく重そうだが、そこは清吉、山師の経験を存分に活かす。樫の太いのを二本切って地面に並べ輪木にし、その上に平岩を載せて縄で縛り、息子と三人で引きずった。そして礎石の横まで持って来ると、梃子と四人の人力を使って四苦八苦しながら載せた。すると、石組みの見事な塚ができた。これなら簡単に風化しない。さらに、貞重と大工の墓石もその塚の前に立てた。

塚になる岩を物色しているとき、清吉は財布を見つけた。田舎では一生お目にかかることができないような赤い絹の地に黄色の菊の刺繍があしらわれた豪華なものだ。中をあらためると、黄金色に輝く小判が二枚と折りたたんだ短冊が三枚入っていた。短冊を開くと、

やまざくら　散るなら散れよ　わが庵に　荒れ破れたる　屋根染まるまで

新緑の　若葉のごとく　清らかな　しのぶわが妹　いまはいずこに　（妹：恋人）

前山に　落ちては寂し　黄昏に　亡き母おもひ　われ泣き濡れる

と、蛍らしい稚拙だが素朴な和歌がしたためてあった。清吉はその短冊を蛍の形見として懐に入れ、小判は財布ごと塚の下に埋めた。そして、最後に母の家に蛍が残していった上衣を塚に被せた。

作業に手間取り薄暮になった。さて帰ろうと、四人でできたばかりの塚の前にかがみ、再び丁重に拝んでから立ち上がったとき、塚の後ろから豆粒ほどの灯が浮き上がった。ゆったりとした間合いで点いては消え、点いては消えを繰り返している。よく見ると、一匹の蛍だった。蛍は四人の頭上をくるくると舞ったあと、再び塚の下に隠れてしまった。蛍の季節には早いし、蛍がこんな山奥にいるはずがないと、四人は不思議そうに顔を見合わせた。しかし、すぐにそれが蛍様の御霊だと言い合って、再び塚に向かって手を合わせた。

そして薄闇の中、急いで帰路についた。最初、妻が夜の山道は怖いと不安を漏らしたが、尾根道は満月が煌々と照らし、山腹の木陰に入っても不思議と月の木漏れ灯が夜道を浮き上がらせて、難なく四人は山を下りた。

その後、前山周辺で二ヶ月ほど続いた落人狩りは一段落し、猿飼や和田の集落も以前の生活に戻った。結局、その周辺では蛍たち以外の落人は発見されなかった。噂では、屋島の戦いで逃げ遅れ、落人狩りをうまく潜り抜けた武者や女人の多くは阿波に落ちたらしい。

また一部の里人の間では、次のような噂がまことしやかに囁かれていた。

「長門の壇ノ浦の決戦で入水した安徳天皇は偽者で、本物の帝は屋島の戦いの際、うまく阿波に逃げおおせ、いまでは祖谷の山奥でひっそりと隠れ住んでおられる」

清吉は蛍の塚を「姫塚」と名付け、和田だけでなく近隣の集落にその由来を語った。清吉は郷長に頼んで、和田から姫塚への山道を切り開き通いやすくした。姫塚は猿飼の太平の山道からよりも、和田からのほうが近道となった。清吉は老衰するまで姫塚への山道の手入れを続け、しばしば香華に訪れた。

鎌倉幕府が成立し、世の中はよくなると思いきや、全国に地頭が派遣され税の徴収はますます厳しくなった。いわゆる「泣く子と地頭には勝てぬ」という言葉どおり、地頭の横暴はこんな山郷にも浸透してきたのだ。和田や猿飼の集落も例に漏れず、一気に生活は苦しくなった。近郷の者は、こぞって姫塚に参り源氏の世を恨んだ。また、蛍が童好きだったことが

尾びれとなり、いつの間にか姫塚は子どもの病を治してくれると評判になった。

ある日、まむしに咬まれ前夜亡くなったばかりの五つの息子を背負った母親が、姫塚の前に現れた。家族が止めるのも聞かず、藁をもすがる思いでやって来たのだ。そして、泣きながら姫塚にお祈りした後振り返ると、息絶えたはずの息子がひょいと起き上がってきたのだ。

またある日、主人を亡くした母親が二人の幼子とともに姫塚の前で手を合わせていた。主人は少なからぬ借金を残して世を去り、その後しばらくは実家や親類の援助を受けながらやってきたが、とうとうやりくりがつかなくなった。そんな彼女もすがる思いで姫塚にお参りにやって来たのだが、やはりもう生きてはいけないと、お参りした後、姫塚の向こうの崖の上に三人で立った。手をしっかりとつなぎ合わせ、念仏を唱えながら、まさに飛び降りようと足が浮いた瞬間、何者かに襟首をつかまれ崖の上に引き戻された。ふと我に返り、姫塚に戻ると、塚の上に小判が一枚置かれていたそうだ。

姫塚はその後もさまざまな霊験をあらわし、さらに評判を呼び、お参りに訪れる者が絶えなかった。

戦国期を経ると、さすがに訪れる人はまばらにはなったが、前山の麓の村人が香華を絶やさず続けてきた。

江戸時代末、讃岐国庵治村の小治郎という石工が姫塚の上に墓標を建てた。平家の末裔という小次郎が平家ゆかりの地を廻国巡礼する際、最後に立ち寄ったという。屋島を向いた墓標には「姫塚」の題字を中央に、「天保十五甲辰年　小治郎　庵治村廻国」と彫られているが、現在ではだいぶ風化して判読しづらくなっている。

蛍たちが亡くなってから約八百五十年後の現在、山の手入れがなされなくなり藪となった前山西峰の頂には、以前と変わらず姫塚が鎮座している。そして、地元の有志が数年に一度、墓標に掛ける着物を交換している。

墓標の着物が替えられた夜には、季節を問わず、一点の蛍の灯が姫塚の周りを舞うという。